

# 近世中期越前大野城下町の免割絵図に関する考察

渡 邊 秀 一

## 〔抄 録〕

大野市歴史民俗資料館所蔵の「大野町免割絵図」は、越前大野城下の町人地13町および野口村の屋敷地に対する免相（年貢率）を7段階に分け、免相ごとに賦課地域を彩色し、一覧にした絵図で、作成年は寛保3年（1743）とされている。より正確に言えば、免相・免割の変更案を絵図に仕立てたもので、寛保3年以前と考えられる免相・屋敷高も文字情報として記載されている。

本稿では、全13町のうち、3町を対象に寛保3年以前の免割を復元的に把握し、変更案との異同を検討することで以下のような結果を得た。第一に町人地の町政、経済活動の中心と考えられている地区の免相を低下させる案であったこと、第二に野高の屋敷地や裏屋敷も表屋敷と同様の貢租負担をめざす案であったことである。前者は町政と経済活動の中心が分離しつつある状況をうかがわせ、後者は町屋敷地としての実態から、表屋敷・裏屋敷・野高屋敷を一体化しようとしたものであると理解することができる。

**キーワード** 近世城下町、絵図、免割、越前大野

## 1. はじめに

大野市歴史民俗資料館に「大野町免割絵図」（仮称<sup>(1)</sup>）と呼ばれる絵図が所蔵されている。越前大野は大野城下の町人地であるが、町人地の地子免除は行われず、天和3年（1683）の時点で本高5087.873石の村高をもっている<sup>(2)</sup>。別の言い方をすれば、大野城下の町人は町奉行支配であり、他の大野藩領内の藩政村と行政的には異なるが、土地に着目すれば町人地も一定の生産高をもつ土地として把握されており、他の藩政村と同様に年貢の貢納義務を負っているということである。

「大野町免割絵図」の最も大きな特徴は、近世城下町における免割という他の城下町ではほとんど見ない内容であることである。これに加えて、図の周囲に配された文字情報の多さという点も挙げられる。その文字情報を見ていくと、免割という図の内容と関係づけが可能な地理的要素を含むものと、地理的要素を見出しにくいものとに分けることができる。同じ文字情報

であっても、前者が図の内容を理解するうえで欠かせない情報であるとみなせるのに対して、後者は免割という図の主題との意味的關係が不明である。そこで、以下では当該絵図の記載情報の概略を提示し、文字情報について図との意味的關係の有無を確認したうえで、図およびそれと意味的關係が認められた文字情報とによって大野町免割絵図の読解を試みたい。

近世都市の地子に関する論考は、地子の免除を通して近世的な都市空間の成立を考察するものや地子負担の定量的分析から都市構造を論じるものなど、少なくはない<sup>(3)</sup>。しかし、一都市内における免割についての論考は、管見の限りでは見当たらない、筆者は前々稿、前稿において越前大野の「渡り地浮地絵図」の考察を通して、大野城の拡張部分について景観的には城内の武家屋敷地であっても、浮地庄屋の管理下にあり、村役人による用地測量も行われていたこと、また城外の渡り地は名目的には御用地（武家地）であるが、実質的には耕作地であり、両者が可変的な関係にあることを指摘した<sup>(4)</sup>。これは「都市」として理解されている近世城下町が、都市的な場であると同時に、村落的な性格も残していたことを示している。本稿で取り上げる「大野町免割絵図」も、町人地を単なる都市を構成する屋敷地の集積とみるのではなく、貢租負担の義務を負う生産地としてとらえたものである。これらを通して、近世の地方城下町の都市的でありかつ村落적であるという、両義的存在形態について考察する契機としたい。

## 2. 大野町免割絵図の記載情報

### (1) 記載情報の種類

「大野町免割絵図」（90cm×145cm、図1）は、天和2年（1682）に越前大野に入封した土井家の支配のもとで、越前大野城下の町人地13町および野口村の屋敷地に対する免相（年貢率）を7段階に分け、免相ごとに賦課地域を彩色して一覽にした絵図である。作成年は、寛保3年（1743）とされている。それは、当該絵図に「寛保三癸亥年五月 段免合印」と記載されていることによるものである。

当該絵図にはこれとは別に「此絵図之通御會所へ宍通納メ候 作主矢藤松元」という記載があり、それに続けて安永4年（1775）に「松田与惣左衛門忠興」が、慶応元年（1865）に「三嶋藤橘常通」が筆写したことが連記されている<sup>(5)</sup>。ただし、「寛保三癸亥年五月 段免合印」と「此絵図之通御會所へ宍通納メ候 作主矢藤松元」、さらに二度にわたって筆写されたという記事の筆跡はそれぞれ明らかに異なっている。

寛保3年前後の現存資料が少なく、当該絵図の作者として記載された「矢藤松元」の名は資料中に見出せない。ただ、当該絵図の清書絵図が大野城内三之丸にある会所に提出されたという記事に信を置かなれば、作成者は町年寄や町庄屋といった町役人層あるいは村役人層であったと推定される。越前大野における矢藤家は町年寄を勤める家で、寛保3年当時も大野町町年寄2名のうち、1名が矢藤源左衛門であった<sup>(6)</sup>。「矢藤松元」とは、この矢藤源左衛門である

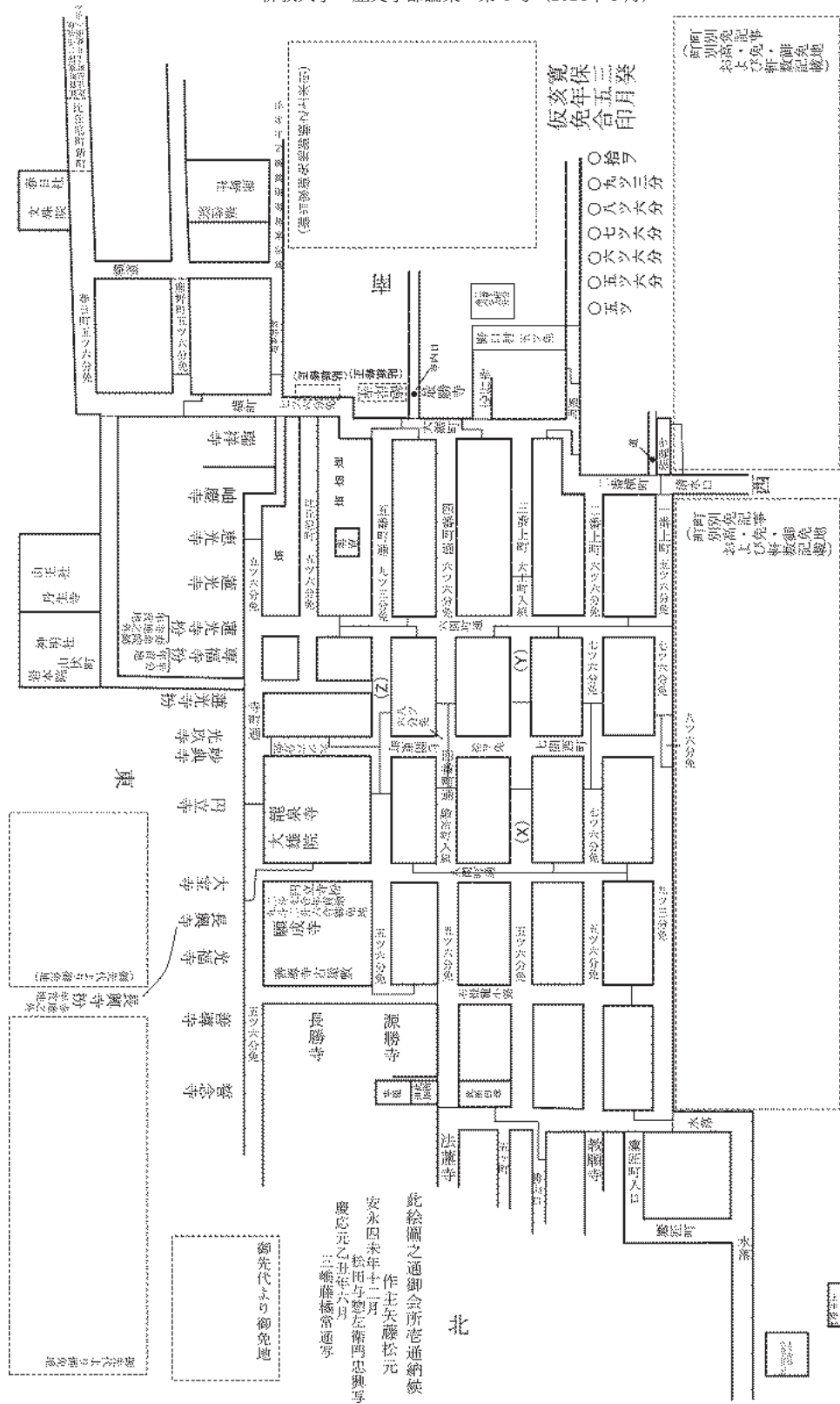


図1 大野町免害絵図 (トレース図)

可能性が高い。しかし、「矢藤源左衛門」ではなく「松元」と号かと思われる記名であることから、この記述そのものは後の加筆であったと思われる。また、松田・三嶋両人の場合は諱が記載されているおり、加筆時期は明らかにできないが、両人の筆写に関する記事も後年に書き加えられたものと考えるべきであろう。

大野町免割絵図の記載内容の概略は以下の通りである（図1）。図の中央に近世城下町越前大野の町人地を街区・街路と寺社を描くことで素描し、免相の高下とその賦課地域を示している。免相は「拾ヲ」から「五ツ」までの7段階で、それにしたがって街路を彩色しているが、現状では褪色とともに混色があり、彩色による免の判別が難しい部分もある。それを補って免相の判別を可能にしているのは、免割の区画を示す墨線と墨書による免相の明示である。ただし、絵図には墨書による免相の記載を欠いた箇所が3か所ある（図1、(X)、(Y)、(Z)）。また、彩色・免割の区画線・免相の明示と3種の表現によって記載された免割は、町単位あるいは街区単位といった簡易な分け方ではなく、一町が複数の異なる免に分かれる複雑なものであるが、当該絵図には町界や屋敷割が記載されていないため、町域と免割された区域との関係をこの絵図から直接に読み取ることはできない。

絵図に基づいて免割の状況を大まかに言えば、免相は城下町の北部に比べて南部で高くなる。なかでも一番町通と七間町通を軸に、七間町通から四番町通あるいは五番町通を経て横町通の東部に至る地区がより高い免相になっている。一番町は越前大野における中心街的性格をもつ地区であり、七間町通は城下町の南北の中心に位置する街路である。また、横町は美濃へと続く街道の出入り口に位置している。そして、そこから離れるにしたがって免相も低下し、城下の周縁部は概ね「五ツ六分」の免相である。

また、免相の設定で注意を引くのが野口村と二番上町分の畑地である。天和3年の大野町本高5087.873石は5つの枝村が含まれていた<sup>(7)</sup>。野口村も大野町の枝村の一つであるが、野口村の畑地のみに免相「五ツ」が設定されている。また、二番上町分の畑地も野口村内にあり、免相は野口村と同じ「五ツ」である。免割絵図では野口村内に位置する二番上町分の畑地について、この他に「二番上町畑地六斗六升」と記載している。享保8年「渡り地浮地絵図」では既に16か所に本家・葛家の記号（○）が、3か所に地名子の記号（△）が記載されているが、享保15年「大野町絵図」では本家・葛家記号が1か所だけになり、そこに「六斗六升」と明記されている。免割絵図の記載も享保15年と同じ本家葛屋1軒分であったと思われる。こうした野口村耕作地に対する免相の設定は、そこが検地帳等の帳面の上では畑地であっても、実際には屋敷地として利用されていたことを示している。ただ、野口村内に免相が設定され、屋敷高として記載されるようになった時期と経緯は不明である。

この図の周辺には「御先代より御免地」、「御當家御免地御郷帳上米引」が、凡例の下には町別の免別石高・御免地高（以下、町別免割記事と記載）が記載されている。「御先代より御免地」は48件の御免地高とその所有者を列挙したものである。48件のうち34件は寺社地で、寺扮屋敷

地2件、町蔵用地・牢屋用地各1件、町人地10件である。また、「御當家御免地御郷帳上米引」は18件で、寺屋敷地2軒のほかはすべて町人地である。

町別免割記事の記載内容は、町名・庄屋名、免相別の屋敷高、御免地、家数（寺院を含む）などである。ここには13町が記載されているが、二番上町庄屋は二番下町の庄屋が兼任しており、庄屋は12名である。町別免割記事で注目すべきことは、以下の三点である。第一点は、免割図に記載されていた野口村に関する記事がないこと、第二点は凡例にない免相が含まれ、10段階に分かれていること、そして第三点は「御墨印引」と記載された御免地の対象者名が「御先代〆御免地」や「御當家御免地御郷帳上米引」と一致しないものが多いということである。とくに免の設定の相違は当該絵図の主題に関わることであり、改めて検討を進めることが必要である。

## (2) 文字情報の検討

三つの文字情報のうち、「御先代〆御免地」および「御當家御免地御郷帳上米引」は時間的な情報を含み、記載内容の

時間的順序が示されている。「先代」に対して、「当代」ではなく、「當家」となっている点から、「當家」とは天和2年に入封した土井家を指し、先代とは同年に大野から明石に移った松平家を指していると考えることが適当であろう。

表1は絵図に記載された「御先代〆御免地」に基づき、記載内容を一覧にしたものである。これによると、御免地は寺社地と町人地に分けることができ、さらに町人地は役所の敷地（町蔵・牢屋）と個人の屋敷地とに分けることができる。寺社地のうち、法蓮寺・明源寺の御免地高は法蓮寺2石6斗8升、明源寺8斗6升となっているが、1730（享保15）年「大野町絵図<sup>(8)</sup>」では法蓮寺・明源寺の寺地はそれぞれ2石8升、1石5斗で、この2寺のみが異なっている。「大野領諸宗寺方寺領記」によると法蓮寺は「一、高式石六斗八升 屋敷内式石八升 御

表1 「先代〆御免地」の記載内容

記載名	引高 (石)	記載名	引高 (石)
春日社領	1.915	国生社領	1.682
山王社領	2.430	矢藤弥七郎	1.600
神明社領	4.368	右同人	1.600
圓和寺	0.300	蓮光寺	7.107
教願寺	8.352	友恵村専福寺	2.667
圓立寺扮	0.926	蓮光寺扮	1.960
誓念寺	3.446	光玖寺	3.020
洞雲寺	10.148	妙典寺	7.733
清瀧社領	3.927	圓立寺	6.189
曾源寺	4.333	大寶寺	7.159
塗師治左衛門	0.528	長興寺	1.300
町蔵	1.467	光福寺	2.313
角屋藤右衛門	0.836	願成寺	0.887
猪自良伊右衛門	0.560	善導寺	2.426
紙屋五兵衛	0.810	古屋敷同寺	4.501
二番町庄次郎扮	0.810	牢屋	0.473
瀧波朔元	2.696	浄勝寺	4.753
角屋藤右衛門	0.757	奥寮	1.312
法蓮寺	2.180	龍泉寺	2.093
篠座社領	10.000	大雄寺	3.040
明源寺	0.860	岫慶寺	9.864
笹嶋道忠	1.460	恵光寺	9.720
最勝寺	7.893	長勝寺	4.766
徳岸寺	1.294	瑞祥寺	8.587

免地」となっていることから<sup>(9)</sup>、「御先代より御免地」は前者の数値を、享保大野町絵図は後者の数値を記載したものと思われる。御免地のみを挙げるのであれば、享保大野町絵図の数値が正しいというべきであろう。また、明源寺は「寺領記」も1石5斗と記録しており、免割記事に8斗6升と記載された事情は明らかではない<sup>(10)</sup>。

町人地12件については、宮澤秀和家文書「天和三年亥九月町惣高書上之写」（以下、町惣高書上<sup>(11)</sup>）に土井家入封翌年の御免地が記載されている。長くなるが、一部を省略しつつ、以下に示しておこう。なお、①～⑭の番号は筆者が便宜上付したものである。

史料1

天和三年亥九月

町惣高書上之写

右之高寄

一、高四千貳百拾石八斗貳升三合四勺

—①

此御物成 亥年<sup>に</sup>定免三ツ五分

—②

米千四百七拾四石貳斗八升八合

内

高八拾八石八斗壹升八合

先規<sup>に</sup>出分

戌亥兩年ニ御侍家數町地子

同四拾三石七斗三升八勺

御免地三百四拾六石貳升壹

合六勺引高之内町高ニ入ル

町高之内

一、高四拾石九斗五升八合

下据

但、但馬守様御代<sup>に</sup>御物成ニ高壹ツ取

（中略）

一、同三百四拾六石貳升壹合六勺 前々<sup>に</sup>御侍家數土井堀ニ引ル

又右之訳

一、高貳百八拾五石六斗貳升壹合貳勺

前々<sup>に</sup>引高

町年寄

一、同壹石五斗四升三合四勺

庄兵衛

—③

是ハ町年寄仕候ニ付御年貢御免被成候

同断

一、同壹石七斗六合

文六

—④

同様

月行事



- 一、高四斗壺升貳合 猪右衛門 —⑤  
 是ハ月行事仕候ニ付御年貢御免被成候  
 同断
- 一、同六斗 七兵衛 —⑥  
 同様
- 一、同貳石貳斗五升三合 藤右衛門 —⑦  
 是ハ出羽守様御代々御証文御座候
- 一、同貳石六斗九升六合 全徳 —⑧  
 是ハ但馬守様御代々
- 一、同壺石六斗貳升 正哲 —⑨  
 右同断
- 一、同壺石四斗六升 道忠 —⑩  
 是ハ出羽守様御代々御証文御座候
- 一、同三石貳斗 新七 —⑪  
 是ハ但馬守様御証文御座候
- 一、同壺石四斗六升七合 町蔵屋敷 —⑫  
 御公儀様  
 亥年御奉行様迄願書指上申候得者町御蔵屋敷ニ被下候
- 一、同壺斗八升八合 時鐘屋舗 —⑬  
 勺 戌亥兩年ニ御侍屋敷町地子  
 一、同四拾三石七斗三升八合 御免地三百四拾六石貳升壺  
 合六勺引高之内町高二入ル
- 惣町高合五千百七拾六石六斗九升壺合 本高・出分共 —⑭  
 内
- 高五千八拾七石八斗七升三合 本高御前帳之上 —⑮  
 （中略）

右之御免相之儀大小之百姓奉願候処ニ願之通被仰付被下、殊ニ町屋敷并田地其所又ハ土地ニ応し、御免相庄屋并惣百姓致相談無高下様ニ仕上ケ候様ニと被仰付候ニ付、庄屋惣百姓立合如此帳面相記し差上申候通御年貢御上納仕候得者、不殘百姓御助ニ相成難有仕合ニ奉存候、依之惣百姓庄屋共判形仕差上申候、仍而如件、

天和三年亥九月

庄屋

忠右衛門 印

（中略）

		大工方庄屋	
		与左衛門	印
		町年寄	
		文六	印
		庄兵衛	印
御奉行様			
跡付り			
一、高四千四百六拾三石七斗三升	町分		—⑩
内			
三百四拾六石貳升壹合六勺	前々	永引	
六斗貳升九合	亥年	永流引	
壹石七斗六合	町年寄	文六屋敷へ被下候	
四斗壹升貳合	月行事	猪右衛門屋敷へ被下候	
壹石四斗六升七合	町蔵	屋敷へ被下候	
拾石ハ	両月行事	役料ニ被下候	
壹斗八升八合	鐘撞	屋敷へ被下候	
三石貳合	職人	屋敷へ被下候	
内			
九斗貳升	銀屋市郎	兵衛	
七斗貳升八合	晝屋小十郎		
八斗貳升六合	とぎや	六右衛門	
五斗貳升八合	ぬし屋次	右衛門	—⑪
(中略)			
小以			
四百拾三石六斗壹升三合六勺			

町惣高書上（史料1）中の⑩が越前大野町の本高である。それに枝村分（史料では省略）および出分を加えた惣町高が⑪になっている。そこから荒や御免地等の高を差し引き、課税対象となった町高が⑫で、⑬は年貢率を示している。また、引高の内、庄兵衛（⑭）から七兵衛（⑮）までは町役人層の屋敷地に対する年貢の免除高である。これについては同史料の「跡付り」にも記載があり、そこでは文六屋敷・猪右衛門屋敷と月行事役料になっている。そして⑯の藤右衛門から⑰の新七までが町人地の御免地、⑱町蔵屋敷・⑲時鐘屋敷が役所敷地の御免地である。藤右衛門以下5人の御免地は「出羽守」、あるいは「但馬守」以来のものであること



が記載されているが、「出羽守」とは松平直政（大野藩主、寛永元年-1624-～寛永10年-1633-）であり、「但馬守」（大野藩主、正保元年-1644-～延宝6年-1678-）とは松平直良を指している。したがって、これらは土井家入封の天和2年以前からの御免地である。

この町惣高書上と「御先代方御免地」（表1）を照らし合わせてみると、瀧波朔元の2.696石が史料1の⑧に、以下同様に笹嶋道忠の1.46石が⑩に、紙屋五兵衛・二番町庄次郎扮の各0.81石が1.62石（⑨）に、矢藤弥七郎1.6石2件が⑪に該当していることは明らかであろう。また、表1で0.836石、0.757石の2件の御免地をもつ角屋藤右衛門は史料1では⑦の2.253石であり、4斗の不足が生じているが、その経緯については不明である。さらに、表1の塗師治左衛門0.528石は史料1「跡付り」の職人屋敷にその名があり、御免地高も一致している。以上のことから、「御先代方御免地」は松平家時代に御免地となり、土井家支配のもとで御免地が認められたものについて列記したものであると言えよう。ただし、町蔵屋敷は「亥年」すなわち天和3年からの御免地とされているが、「御先代方御免地」にも記載がある。また、史料1中の時鐘屋敷についてはとくに記載がなく、御免地になった年も不明であり、「御先代方御免地」記事中の「牢屋」が史料1には欠けている。

表2は「御當家御免地御郷帳上米引」に記載された17件をまとめたものである。合わせて、弘化4年（1847）「午御物成皆済目録<sup>(12)</sup>」の中から対応する記事を抜き出し、一覧にしてある。対応記事が見いだせるのは17件のうち7件だけであるが、この史料が弘化4年時点において御免地であるものを記録しているためである。また、表2の「橋本奎右衛門」および「松尾三郎兵衛」については、宝暦13年（1763）「一番上町屋鋪高水帳<sup>(13)</sup>」に以下のように記録されている。なお、冒頭の番号は高水帳における記載順であり、便宜上筆者が付したものである。

松尾三郎平跡

(24) 一高五斗八升七合      竹内茂兵衛

橋本奎左衛門跡

(25) 一高五斗八升七合      安川藤七

「一番上町屋鋪高水帳」の(24)・(25)は、宝暦13年当時に竹内茂兵衛・安川藤七の屋敷地であったことを記録したものであるが、両名の右方にそこが松尾三郎平・橋本奎右衛門の屋敷であったことも記載している。竹内・安川は大野藩士であり、また松尾らも大野藩士であった。町屋敷地の一角がいつ侍屋敷になったのかは記録が見いだせず明らかにできないが、一番下町における侍屋敷の存在は享保8年（1723）「渡り地浮地絵図<sup>(14)</sup>」でも確認でき、享保15年（1730）「大野町絵図」一番下町には「三郎平 高五斗八升七合」、「奎右衛門 高五斗八升七合」と記載されている。

表2 「御當家御免地御郷帳上米引」の記載内容

記載名	引高 (石)	対応記事 (弘化4年「午御物成皆済目録」による)		引高開始年
橋本奎左衛門	0.5870			
松尾三郎兵衛	0.5870			
椿坂清右衛門	0.9470	七斗四升壺合三勺 此高九斗四升七合	亥より椿坂清右衛門屋敷地子米引 高より七ツ六分本口共 一番下町分	享保5(1720)
長岡柳宅	1.1930	九斗三升三合九勺 此高壺石壺斗九升三合	午より長岡柳宅屋敷地子米引 高より七ツ六分本口共 一番上町分	元文3(1738)
檜物屋庄兵衛	0.7880			
浦井又兵衛	1.9985			
牛首屋伊兵衛	1.2080	壺石壺斗五升七合壺勺 此高壺石式斗八合	戌より牛首屋十右衛門屋敷地子米引 高より九ツ三分本口共 一番下町分	寛保3(1743)
稲津新兵衛	2.3390			
柄巻屋長兵衛	0.7600			
牛首屋九左衛門	1.0533 0.8000			
柳屋八兵衛	0.7930	五斗三升九合壺勺 此高七斗九升三合	戌より柳屋八兵衛屋敷地子米引 高より六ツ六分本口共 七間町分	寛保2(1742)
柳屋八兵衛	1.8972			
□□屋七兵衛	1.6305			
右同人	0.7245			
善導寺浮地	1.9990	壺石七斗九升九合	卯より善導寺屋敷引	享保17(1732)
右同断	1.1200	此高三石壺斗壺升九合	高より五ツ六分本口共	
川端善七	0.6400	六斗五升九合式勺 此高六斗四升	酉より川端甚右衛門屋敷地子米引 高より十 本口共 七間西町分	宝暦3(1753)

資料 弘化4年「午御物成皆済目録」は、大野市史編さん委員会(1981)『大野市史 諸家文書編二』  
大野市役所, pp523-531.

あらためて表2を見ると、最も古い御免地は享保5年(1720)で、宝暦3年(1753)までの御免地が列記されている。享保5年は大野藩土井家2代藩主土井利知治世の時期であり、宝暦3年は4代土井利貞治世の時期である。したがって、「御當家御免地御郷帳上米引」は宝暦3年以降に記載されたもので、加筆であることは明らかである。

以上の検討結果から、「御先代方御免地」と「當家御免地御郷帳上米引」とは時間的な前後関係と松平期以降の歴史あるいは由緒を強く意識した一連の記事であるとみなすことができる。このことは、仮免の合意が成立し、絵図が作成された寛保3年5月という特定の時間を指示するという時間のとらえ方とは大きく異なっている。「御先代方御免地」記事および「御當家御免地御郷帳上米引」記事は、免割という絵図の内容から、そして時間のとらえ方という点から、当該絵図とは直接的な関係はない。

以上のように、「御先代方御免地」・「御當家御免地御郷帳上米引」は免割という絵図内容に対する直接的な意味的補完関係は認められないが、敢えて絵図中の他の情報との共通点を見出そうとすれば、それは町別免割記事に御免地の記事が含まれていることである。そこで、まず

表3 町別免記事の引高記載

町	記載名	事由	引高 (石)	免
一番上町分	治左衛門	御免地引	0.528	五ツ六歩
	町蔵	役所引	1.467	五ツ六歩
一番下町分	角屋藤右衛門	御墨印引	0.836	九ツ三歩
	伊右衛門	藤左衛門御墨印之内	0.260	九ツ三歩
	又兵衛	山田見貞御墨印之内	0.810	九ツ三歩
	庄次郎扮	右同断	0.810	九ツ三歩
	瀧波朔元	—	2.696	九ツ三歩
二番上町分	角屋藤右衛門	御墨印引	0.757	七ツ六歩
二番下町分	—	—	—	—
三番町分	笹嶋道忠	御墨印引	1.460	九ツ三歩
大工町分	—	—	—	—
四番町分	明源寺	御墨印引	1.500	六ツ六歩
	矢藤弥七郎	御墨印引	1.600	六ツ六歩
	浄勝寺	御墨印引	4.753	五ツ六歩
	牢屋引	—	0.473	五ツ六歩
鍛冶町分	—	—	—	—
五番町分	—	御墨印引	1.600	九ツ三歩
横町分	—	—	—	—
比丘尼町分	—	御墨印引	1.312	五ツ六歩
	善導寺浮地	—	3.119	五ツ六歩
	内訳 城常跡	—	1.999	五ツ六歩
	六兵衛六右衛門跡	—	1.120	五ツ六歩
七間(東)町分	—	—	—	—
七間西町分	—	—	—	—

町別免割記事に記載された御免地について検討を進めておこう。表3は町別免割記事中の引高の記載をまとめたものである。13町のうち御免地の記載があるのは7町で、それらには寺地と町人屋敷地とがある。ただし、その記載には記載名あるいは事由の記載を欠いたものが多い。一番下町・瀧波朔元の事由は表1にあったように「御免地引」であり、四番町「牢屋引」の事由は町蔵と同じ「役所引」とすべきであろう。また、五番町御免地の記載名はその高から「矢藤弥七郎」であり、比丘尼町1, 312石の御免地は表1の「奥寮」である。同じ比丘尼町の「善導寺浮地」は表2の善導寺浮地2件に該当している。

町別免割記事に記載された寺院の御免地は明源寺・浄勝寺・奥寮、そして善導寺浮地である。また、町別軒数に挙がる寺院は二番下町1軒(円徳寺)、三番町1軒(本伝寺)、四番町3軒(明源寺<sup>15)</sup>・浄勝寺・勝授寺)、五番町2軒(円和寺・託縁寺)、比丘尼町1軒(奥寮)であり、寺町や正善町通、横町通など町人地を囲い込むように配置された城下町周縁の寺院は記載

されていない。このことは、免割が町人地として把握された範囲を対象とするものであることを示している。また、善導寺浮地は、表1の善導寺古屋敷に該当している。しかし、享保15年（1730）の「大野町絵図」では御免地は2.426石であり、善導寺古屋敷は御免地にはなっていない。これとは別に、「大野町絵図」には善導寺への渡り地3件が記載されている。それは、「比丘尼町方渡り地 壺石壺斗四升六合、同断八斗五升三合」、「七間東町方渡り地 壺石壺斗式升」である。享保15年時点では善導寺古屋敷は比丘尼町の渡り地になっていたのである。ところが、その3件の浮地が、表2にあるように享保17年（1732）に御免地になっている。町別免割記事（表3）はその旧渡り地について記載したということであり、また町別免割記事が享保17年（1732）以降に記載されたものであることも判明するのである。

以上のことから、町別免割記事の御免地に関する記載を「御先代方御免地」、「御當家御免地御郷帳上米引」と比べてみると、後者では善導寺御免地が記載されただけで、記載名に違いはあるが、その他は御免地高の点では前者と一致していることがわかる。このことは、善導寺御免地3.119石を除いて、土井家が認めた御免地（御當家御免地）は町高の中に含まれていることを意味している。

### 3. 町別免割記事と免割絵図 免相・免割に関する検討

#### (1) 町別免割記事・免割絵図の検討課題

表4は町別免割記事に記載された町ごとの免相とその屋敷高、家数（寺院を含む）をまとめたものである。当該絵図に記載された「此絵図之通御會所へ壺通納メ候」および「寛保三癸亥年五月 段免合印」の記述に誤りがないとすれば、凡例に示された免相、および町人地を彩色

表4 町別免記事記載の免と町高

	免相(石)											家数 (軒)
	十ヲ	九ツ六歩	九ツ三歩	八ツ六歩	七ツ六歩	六ツ六歩	五ツ六歩	五ツ	三ツ四歩五 厘七毛野免	二ツ三歩六 厘六毛野免	計	
一番上町分			1.8533		13.1089		14.9327				29.8949	48
一番下町分		1.2748	42.3577								43.6325	75
二番上町分					8.1350	17.8690	3.1910	0.6600			29.8550	54
二番下町分					6.8343		33.1381				39.9724	77
三番町分			6.6315			12.3180	40.3332				59.2827	105
大工町分						0.4600	5.1518				5.6118	12
四番町分						21.1270	27.8570				48.9840	60
鍛冶町分						8.0630	3.2050				11.2680	21
五番町分			20.9866		13.2800	2.8920	22.2767				59.4353	59
横町分					12.6550	4.4464	17.3159		2.5750	0.1804	37.1727	82
比丘尼町分						4.2620	33.6351				37.8971	66
七間東町分	6.9134			8.016		0.7000	0.734				16.3634	24
七間西町分	9.2651		4.4616		1.2334						14.9601	23
計	16.1785	1.2748	76.2907	8.016	55.2466	72.1374	198.7705	0.6600	2.5750	0.1804	431.3299	706

して示した免割は寛保3年(1743)時点で計画されたものと考えてよい。とすれば、町別免割記事の免相と免割に関わる記述は、それ以前のものと考えなければならない。さらに、絵図には「段免」と記載されていた。この点を図・記事の情報と考え合わせると、それらは寛保3年に大野町の免相と免割の変更が検討され、町より会所に対してその変更案が提出されたということを示していると理解することが適当であろう。

免相・免割の変更が検討された背景については、資料を欠くため現時点では明らかにできない。しかし、少なくとも免相・免割の変更が計画されたという事実について、さしあたり以下のような課題を挙げることができる。その第一は、寛保3年以前の免相・免割と絵図に記載されたそれらを対照して変更内容を明らかにすることである。この課題を検討するためには記事に基づいて寛保3年以前の免相・免割を復元的に把握することが求められる。第二は、変更案に込められた町方の意識あるいは意図について検討することである。免相・免割の変更は藩当局の立場に立てば貢租の収納高に関わる問題である。したがって、最終的には町方の意思によって決定されるものではないが、大野町免割絵図は町方からの変更案を書き記したものと理解できることから、当時の社会経済的状況を踏まえて町方としての意思が変更案の中から読み取れるものと思われる。そして最後に、変更案に対する藩当局の態度と変更案の実施状況を確認することである。すでに述べたように、「段免」である以上は計画案であったと考えられ、実際に実現したものかどうかは、その後の免相・免割のあり方を通して確認しなければならず、計画案の実施状況に変更案に対する藩当局の意識が現れると考えられる。本稿では紙幅の制約上からこれらの課題すべてを検討することはできないが、諸課題を検討するうえで欠かせない第一の問題をまず取り上げていく。

## (2) 横町における免相・免割の変更案

免相・免割の変更が検討される以前の、大野町の免相は10段階である(表4)。それが図(図1)では7段階に整理されている。その結果として、横町分の「二ツ三歩六厘六毛野免」(0.1804石)および「三ツ四歩五厘七毛野免」(2.575石)、そして一番下町分の「九ツ六歩」(1.2748石)は図に記載されていない。一番下町分については別に後述することとし、以下では野免の消滅を出発点にして、横町における免相・免割に関する変更案を検討する。

横町は大野城下の南端に位置し、野口道から春日町に至る東西街区とそれから分岐した南北街区からなり、前者は西から大鋸町・東新町・横町<sup>(16)</sup>と呼ばれ、後者は熊野町と呼ばれている(図2)。寛保3年(1743)あるいはその前後の横町の屋敷地に関する資料はないが、享保15年(1730)の「大野町絵図」、宝暦13年(1763)『横町屋舗高水帳<sup>(17)</sup>』で補うことができる。「大野町絵図」では街路に沿って町屋を本家と地名子に分け、本家をさらに蔵家・葛家(草葺家屋)に分けて示している。それによると、横町の屋敷地数は86で、北側街区は横町中央部が三番町から五番町の屋敷地で占められているため、29の屋敷地が横町の東西両端部分にみられるだけである。両側町を形成するのは、春日町に接続する東新町と比丘尼町街区に接する横町



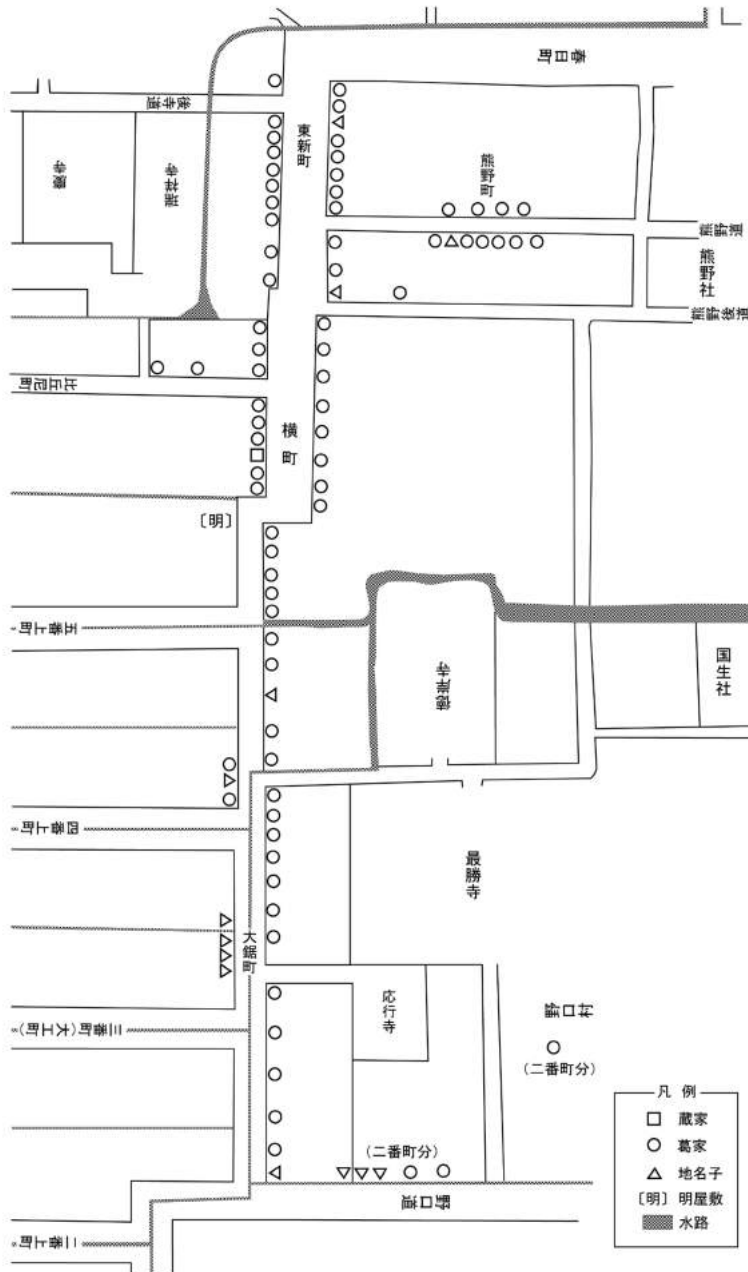


図2 享保15年における横町の屋敷分布  
(享保15年「大野町絵図」による)

部分である。享保15年と宝暦13年の間には33年の時間的な隔たりがあるが、大野町絵図に記載された屋敷高のほとんどがそのまま宝暦13年の屋敷高になっている（表5）。したがって、本稿が検討する寛保3年においても屋敷高や屋敷配置は享保15年・宝暦13年と大差のない状況にあったことが認められよう。

横町の屋敷高は、「大野町絵図」によると36.332石であり、宝暦13年『横町屋舗高水帳』によると38.318石である。資料に記載された数値からみれば横町では約2石の屋敷地が増加したということになる。しかし、それは横町屋敷地の外延的拡大によるものではなく、そのほとんどが『横町屋舗高水帳』に記載された13の裏屋敷高2.4087石によるもの

であることは明らかである。さらに、「大野町絵図」と『横町屋舗高水帳』の記載を対照させると、『横町屋舗高水帳』で裏屋敷地とした0.334石が、「大野町絵図」では他の屋敷地と並んで記載されている。この0.344石の裏屋敷について『横町屋舗高水帳』には「三斗四升四合 裏屋敷 但シ比丘尼町並瀬戸免違」と記されている。瀬戸はこの屋敷地の所有者である。



表5 享保15年・宝暦13年における横町屋敷高

北街区 (東から)	享保15年 「大野町絵図」	屋敷高 石	宝暦13年 「横町屋鋪高水帳」	屋敷高 石	享保15年 「大野町絵図」	屋敷高 石	宝暦13年 「横町屋鋪高水帳」	屋敷高 石	
後寺町通	十太郎	0.156	甚右衛門	0.1804	弥兵衛	0.642	弥兵衛	0.642	南街区 (東から)
	仁左衛門	0.1344	五番町清左衛門份	0.1344	与兵衛	0.612	摩右衛門	0.300	
	小右衛門後家	0.1176	丸郎右衛門	0.1176	与兵衛地名子		與兵衛	0.300	
	市郎兵衛後家	0.204	六郎右衛門	0.24	七兵衛	0.202	七兵衛	0.22	
	六兵衛	0.18	六兵衛	0.18	市三郎	0.45	甚七	0.45	
	安兵衛	0.1322	安兵衛	0.1322	長兵衛份	0.32	同裏屋敷	0.13	
	一ノ喜兵衛份	0.1558	徳兵衛	0.1558	五郎兵衛	0.243	清右衛門	0.32	
	九郎右衛門	0.372	勘兵衛	0.372	新三郎	0.609	五郎兵衛	0.1827	
	吉右衛門	0.18	喜助	0.09	伊右衛門	0.26	新三郎	0.4263	
	弥次兵衛	0.320	吉左衛門	0.09	弥兵衛	1.035	治右衛門	0.13	熊野道
寺町通	四郎兵衛	0.271	弥治兵衛	0.326	与三右衛門	0.228	仁右衛門	0.13	
	長左衛門	0.267	七間東町茂右衛門份	0.271	与三右衛門	0.228	作右衛門	0.345	
			同裏屋敷	0.0837	与三右衛門	0.228	市兵衛	0.345	
			長左衛門	0.267	弥兵衛地名子		孫右衛門	0.345	
			弥三右衛門	0.267	与三右衛門	0.228	与三右衛門	0.228	熊野後道
			同裏屋敷	0.0837	弥兵衛	0.3462	弥兵衛	0.3462	
			同裏屋敷	0.1673	次兵衛	0.5538	七間東町茂右衛門份	0.5538	
			明屋敷	0.251	權兵衛	0.524	權兵衛	0.524	
			明屋敷	0.251	宗兵衛	0.37	彌兵衛	0.37	
			利兵衛	0.479	喜兵衛	0.635	惣三郎	0.635	
比丘尼町通	南町	0.251	同裏屋敷	0.102	弥兵衛	0.7249	又右衛門份	0.7249	
	南左衛門	0.479	清七	0.372	次郎兵衛	0.3411	武兵衛	0.3411	
	武右衛門	0.372	同裏屋敷	0.102	源左衛門份	0.55	平兵衛	0.55	
			六郎右衛門	0.511	与三兵衛	0.267	五番町清左衛門份	0.267	
			同裏屋敷	0.102	五郎兵衛	0.2885	五郎兵衛	0.2885	
			同裏屋敷	0.102	丸兵衛	0.372	奥左衛門	0.372	
			平右衛門	0.7	惣三郎	0.4567	長右衛門	0.4567	
			同裏屋敷	0.344	加右衛門	0.534	太右衛門	0.534	
			由左衛門	0.5535	七左衛門	0.3088	南左衛門	0.3088	
			同裏屋敷	0.3575	伊兵衛	0.3088	利兵衛	0.4008	寺内通
五番町通			同裏屋敷	0.11	甚右衛門地名子	1	甚右衛門	0.8	
			弥右衛門	0.5535	五郎兵衛後家	0.3996	弥右衛門	0.3996	
			同裏屋敷	0.367	与四郎	0.42	吉兵衛	0.42	
			同裏屋敷	0.3575	又右衛門	0.36	又右衛門	0.36	
			伊兵衛	0.64	長右衛門	0.2464	由左衛門份	0.2464	
					七左衛門	0.4066	七左衛門	0.4066	
					六左衛門	0.547	彦兵衛	0.547	
					三四郎	0.826	三四郎	0.862	
					市三郎	0.96	応行寺份	0.96	
					明屋敷	0.7	応行寺份	0.7	熊野町西街区 (南から)
四番町通					応行寺份	0.18	応行寺	0.18	
					応行寺	2.575	応行寺	2.575	
					甚助	0.44	甚助	0.44	
					与次右衛門	0.4	治右衛門	0.4	
					新六	0.883	新六	0.883	
					吉兵衛	1.03	吉右衛門	0.515	
					吉兵衛地名子		甚助	0.515	
五番町通									熊野町東街区 (北から)
四番町通									熊野町西街区 (南から)

「免違」とは町並の屋敷地ではあるが裏屋敷であるため、町並の屋敷と免相が異なっていることを示している。

そこで、試みにこの裏屋敷地、あるいは裏屋敷地と思われる屋敷高を享保15年の屋敷高に加えてみると、35.631～35.685石になる。寛保3年の野免を除く横町の屋敷高は34.4173石であるため若干上回る結果になるが、次左衛門分0.344のように裏屋敷の一部が算入されていた可能性は高いと言えよう。

また、野免については「大野町絵図」に一つの手がかりがある。それは横町北街区の北端・十太郎の屋敷地に「十太郎 壹斗五升六合 是ハ野高也」という記載があることである。享保15年の時点ではこの屋敷地は0.156石であるが、宝暦13年の水帳では0.1804石であり（表5）、これが「二ツ三分六厘野免」の0.1804石に該当することは間違いない。しかし、「三ツ四分五厘八毛野免」2.575石の屋敷地については確定できない。

とはいえ、この野免が免割絵図から消えていることは、野免の屋敷地を他の町並みと同様に取り扱い、屋敷地の免相を適用しようとしたということである。これまで野免という低い課税率であった地域の立場からみれば、大幅な税負担の増加が提案されたことになる。ただ、先に挙げた裏屋敷の「免違」はそれが宝暦13年の屋敷高水帳に記載されたものであることから、町並の屋敷地と裏屋敷地とが一律に税負担を行うという変更案は実現しなかったと言えよう。

以上、横町における免相・免割の変更案に関する検討から、以下のことが確認できた。その第一に大野城下の町人地の中には寛保3年時点で野高の屋敷地が含まれていたこと、第二に横町は裏屋敷をもつ屋敷地が比較的多いという特色をもっていたことである<sup>(18)</sup>。この野高の屋敷地と裏屋敷は景観上は他と一体となって大野城下の景観をかたちづくっていたと思われるが、税制的には街路に沿って立ち並ぶ表屋敷とは異なった扱いを受けていたのである。そして第三に、野高の屋敷地、裏屋敷の用地を含めて免相・免割の変更が検討されたことである。この点は、すべての町屋敷がそれぞれの免相に応じて貢租を負担するということであり、町屋敷地の一元化を図ろうとしたものと受け取ることができる。

### (3) 一番上町の免と免割変更案

一番上町・一番下町は本町とも呼ばれ、七間通の七間西町・七間東町とともに越前大野城下の町人地における中心地区である。一番上・下町は大野城への出入り口である上町口・下町口に接して、大野町方の総会所ともいべき町蔵が一番上町に位置している。表1～3に挙げた御免地を有する有力町人たちも一番町通に集まっているためか、蔵家が比較的多い。一番上町・一番下町は、免相の上では七間西町・七間東町には及ばないものの、比較的高い免相が設定されており、町政上・経済活動上の中枢をなす地域の一つである（図3）。その一番町における免相・免割について変更が検討されたことは、越前大野の町人地の中で起きつつあった社会的あるいは経済的、さらに言えば都市構造的な変化ともかかわっていくように思われる。

一番上・下町の町別免割記事と図に記載された免相・免割の変化から読み取ることができる

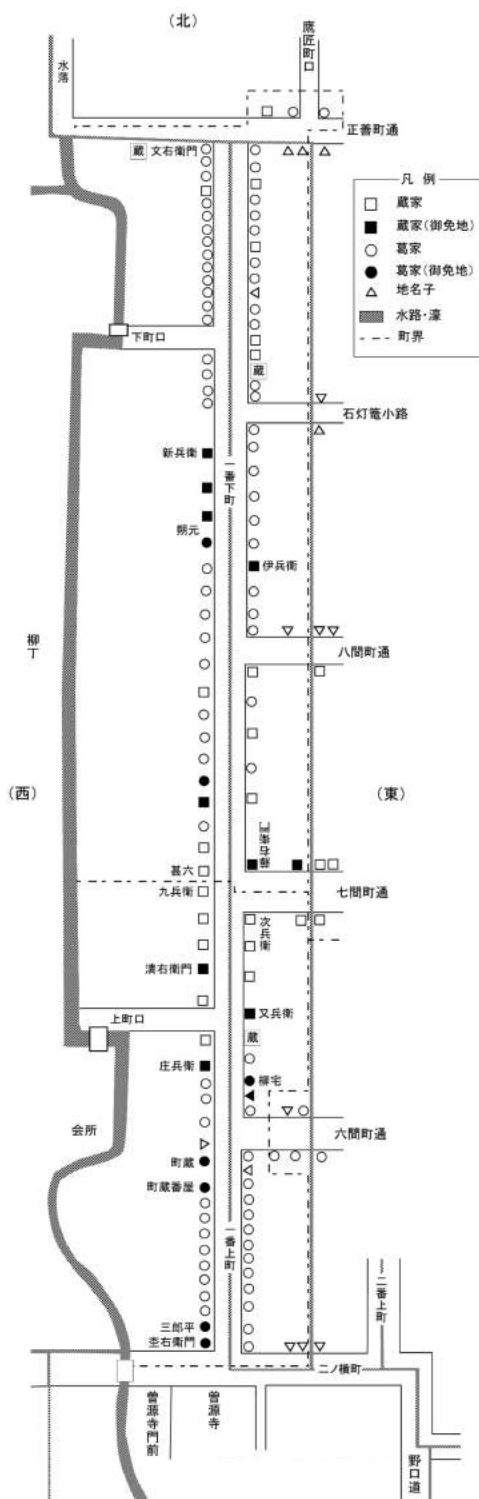


図3 一番上町・下町の町屋配置  
(享保15年「大野町絵図」による)

事柄は、① 一番上町において新たに免相「八ツ六分」を加え、3段階から4段階に免相を変更しようとしていたこと、② 一番下町において免相「九ツ六分」を廃止し、ほぼ「九ツ三分」に統一しようとしていたこと、③ 一番下町のうち正善町筋の屋敷地を「五ツ六分」としようとしていたこと、の3点である。

具体的な検討に入る前に、確認しておくべき点が2点ある。その一つは両町の屋敷高であり、他の一つは両町の町界である。享保15年(1730)「大野町絵図」によれば、一番上町で屋敷高が記載されたのは47件、29.8956石、一番下町では72件、43.6643石である(表6)。両町には宝暦13年「一番上町屋鋪高水帳」および同年「一番下町屋鋪高水帳<sup>(19)</sup>」が残っているが、上町・下町とも屋敷高の記載1件が抜け落れている。ただし、その前後の町屋敷高が享保15年の絵図と一致しており、欠落した屋敷高にとくに大きな変化があったとは考えにくい。そこで、欠落部分に享保15年寺の屋敷高を算入すると、一番上町は屋敷高記載件数48、屋敷高29.5959石、一番下町は屋敷高記載件数77、屋敷高43.9492石になる。享保15年時点で屋敷高が町別免割記事の両町の屋敷高を上回る結果になるが、その差は極めて小さい。そこで、一番上・下町の免相・免割の変更案については、享保15年の屋敷高を参考に検討を進めていく。

また、町界については、屋鋪高水帳の記載範囲および記載順を確認し、「大野町絵図」と照らし合わせることで示したい。宝暦13年「一番上町屋鋪高水帳」の記載順は源助妻0.43石から始まって安川藤七0.587石・長兵衛0.659石、そして甚右衛門0.248石で終わっている。また、「一番下町屋鋪高水帳」によると、下町は平兵

近世中期越前大野城下町の免割絵図に関する考察（渡邊秀一）

表6 一番上町・一番下町の屋敷高と屋敷配置

	享保15年		宝暦19年		享保15年		宝暦13年		
	「大野町絵図」	屋敷高 石	「一番上町・下町 屋敷高水銀」	屋敷高 石	「大野町絵図」	屋敷高 石	「一番上町・下 町屋敷高水銀」	屋敷高 石	
武家屋敷地					一	一	清次郎	0.5867	正善町北
					喜右衛門	0.5004	喜右衛門	0.5004	東より
					喜右衛門份	0.2874	喜右衛門份	0.2874	
					喜右衛門	0.487	喜右衛門	0.487	
西街区 北	文右衛門	0.387	吉郎右衛門	0.387	地名子	0.25	喜右衛門	0.5	正善町通
	長右衛門	0.38	平右衛門	0.38	丸右衛門	0.25	弥三右衛門	0.5	東街区 北
	宗七	0.307	庄三郎後家	0.307	弥三右衛門	0.5	清四郎	0.7	
	孫左衛門	0.53	長右衛門	0.53	伴右衛門	1.1	清四郎	0.4	
	太兵衛	0.477	半九郎	0.477	喜兵衛	0.65	藤七	0.767	
	惣兵衛	0.413	次右衛門	0.413	長右衛門份	0.35	藤七份	0.433	
	淨祐粉	0.3798	次右衛門份	0.3798	長右衛門	0.467	武右衛門份	0.427	
	興兵衛後家粉	0.4745	清兵衛	0.4745	佐左衛門	0.16	庄左衛門	0.66	
	四郎兵衛	0.352	半九郎份	0.352	長兵衛	0.46	長兵衛	0.46	
	七郎右衛門	0.64	七三郎	0.64	三左衛門跡	0.9	治助	0.45	
下町	弥五八	0.36	九兵衛	0.36	三左衛門地名子	0.9	次郎兵衛	0.45	
	九兵衛	0.2627	勝兵衛	0.2627	利兵衛	0.5	一	一	
	彌兵衛	0.2043	次助	0.2043	米村右衛門	0.3	与兵衛	0.3	
	源右衛門份	0.247	四郎兵衛	0.247	平右衛門份	0.301	喜右衛門	0.501	
	平兵衛	0.4285	宗七	0.4285	平右衛門	0.5615	長兵衛份	0.62	
	長兵衛	0.5219	与三兵衛妻	0.5219	藏	0.4805	仁兵衛門	0.5	
	長右衛門份	0.4566	長右衛門	0.4566	杉右衛門	0.4	与右衛門	0.4	
	新兵衛份	0.587	長左衛門	0.587	勘七	0.352	勘七	0.352	右灯籠小路
	新兵衛	1.636	廣兵衛	0.586	武兵衛	0.386	庄兵衛	0.386	
	新兵衛	0.703	緒之助	1.741	惣右衛門	0.5	宗吉	0.5	
以下、上町	源兵衛娘屋	0.722	一ノ三太兵衛頭	0.722	久左衛門	0.5	勘次右衛門	0.5	
	源元	1.974	元隆粉	1.406	長兵衛	0.428	仁兵衛	0.48	
	庄吉	0.613	元隆	0.668	平兵衛份	0.8174	仁兵衛份	0.8174	
	又左衛門份	0.633	庄吉	0.613	南左衛門	0.4086	仁兵衛	0.4086	
	又左衛門	0.633	又左衛門份	0.64	伊兵衛	0.86	儀右衛門	1.208	
	二ノ又兵衛粉	0.5	又左衛門	0.893	伊兵衛份	0.348	儀右衛門份	0.488	
	元右衛門	0.38	伊兵衛	0.52	志二郎	0.29	漆右衛門	0.39	
	文吉	1.706	庄吉粉	0.709	長右衛門	0.39	長右衛門	0.39	一八間町通
	喜兵衛	0.714	利右衛門	1.697	生兵衛份	0.4	山田兵衛	0.5	
	太郎兵衛	0.713	喜兵衛	0.714	庄兵衛	1.0424	次郎右衛門	0.9434	
上町	宗寿	0.81	山田口上	0.81	佐右衛門	0.666	文右衛門	0.65	
	二ノ又兵衛粉	0.81	次郎右衛門份	0.81	平右衛門	0.65	平兵衛份	0.86	
	中兵衛	0.82	中右衛門	0.82	佐右衛門	0.48	佐右衛門	0.41	
	六郎兵衛	0.525	喜右衛門	0.525	藤右衛門	1.096	平兵衛份	0.26	一七間町通
	長六	0.587	六郎兵衛	0.587					以下、上町
	九兵衛	0.43	源助妻	0.43	次兵衛	0.248	喜右衛門	0.248	
	八郎右衛門份	0.3414	九郎文右衛門	0.3414	源郎右衛門份	0.485	四郎右衛門份	0.2914	
	十兵衛	1.0385	浦井太兵衛	1.0385	源郎右衛門	0.3723	四郎右衛門	0.3723	
	孫右衛門	0.72	松物屋孫右衛門	0.72	次平	0.2565	浦井半右衛門份	0.2565	
	源兵衛	0.987	高屋孫兵衛	0.987	又兵衛	1.4255	浦井半右衛門	1.4255	
上町	清右衛門份	0.947	清右衛門份	0.947	藏	0.573	浦井半右衛門份	0.573	
	久左衛門	0.839	安右衛門	0.839	平右衛門	0.413	柳伯粉	0.413	
	庄兵衛	0.788	松物屋庄兵衛	0.788	柳宅	1.193	柳伯	1.193	
	徳之	0.485	小右衛門	0.485	喜八郎地名子	1.017	喜八郎	0.717	
	七兵衛	1	治右衛門	1	勘左衛門	0.425	勘左衛門	0.425	
	一番下町庄兵衛份	0.6	一番下町庄兵衛份	0.6	長左衛門	0.424	長左衛門	0.424	
	七兵衛粉	0.4027	又市粉	0.4027	庄兵衛	0.424	中左衛門妻	0.424	一六間町通
	町藏	1.467	町藏	1.467	庄兵衛地名子	0.524	重兵衛	0.524	
	町藏番屋	0.627	仁助	0.8535	仁兵衛	0.55	長右衛門	0.55	
	庄左衛門份	0.76	清右衛門	0.5335	三右衛門	0.683	清兵衛	0.683	
西街区 南	与次兵衛	0.5	与次兵衛	0.626	又右衛門	0.58	清兵衛	0.58	
	九兵衛	0.526	与七	0.4	与左衛門	0.528	藤三郎	0.528	
	喜右衛門	0.647	喜左衛門	0.647	源助	0.495	源助	0.495	
	七左衛門	0.48	七左衛門	0.48	五郎兵衛	0.437	五郎兵衛	0.437	
	太左衛門	0.487	三郎	0.487	弥兵衛	0.387	長左衛門	0.387	
	孫兵衛	0.54	孫右衛門	0.54	次左衛門	0.528	浦井多兵衛份	0.528	
	三郎兵衛	0.587	竹内茂兵衛	0.587	由兵衛	0.621	由兵衛	0.621	東街区 南
	主右衛門	0.587	安川藤七	0.587	喜九郎	0.659	長兵衛	0.659	



衛扮0.56石・同人扮0.3185石・角屋藤右衛門0.5175石から始まって、忠右衛門0.5石・吉郎右衛門0.387石、そして六郎兵衛0.587石、喜右衛門0.489石から清次郎0.5867石までの4件を記載して終わっている。清次郎以下は正善町北街区の屋敷地である。この記載順を「大野町絵図」と照らし合わせると、一番上町・一番下町の町界は、東街区では七間町通をはさんで次兵衛（甚右衛門）・藤右衛門（平兵衛扮）の間に、西街区では九兵衛（源助妻）・甚六（六郎兵衛）の間にあることがわかる（表6、図3）。

一番上町に予定されていた「八ツ六分」の免相は、図1によると七間町通の西行き当たり、西街区の一角である。そこはちょうど一番上・下町の町界付近に当たり、新たに免割された「九ツ三分」と一番町通をはさんで分布している。一番上町では南から七間町通に向けて順次免相が上がっており、寛保3年以前の免相「九ツ三分」も一番町通と七間町通の交差する付近に免割されていたものと思われ、一部が新免割の「九ツ六分」になったと考えることが適当であろう。新免割の「九ツ六分」は、絵図に基づけば、七間町通南側儀が市街区の次兵衛分（表6、図3）程度のものであるが、明らかに屋敷高が不足である。一番上町の七間町通付近で1.8533石の屋敷地を正確に確定することは難しい。屋敷高末尾が3勺になるような屋敷高の組み合わせがこの付近には見いだせないためである。敢えてそれを想定しようとするならば、享保15年西街区の九兵衛0.43石、八郎右衛門0.3414石、同じく東街区の次兵衛0.248石、四郎右衛門扮0.485石、四郎右衛門0.3723石の計1.88石の屋敷地あたりと考えるほかはない（表6）。

また、一番上町の「七ツ六分」は東街区で言えば六間町通から七間町通南まで、「五ツ六分」は横町通から六間町通まで、西街区で言えば七兵衛扮屋敷地、あるいは一番下町庄兵衛扮屋敷地付近が境界になる。「五ツ六分」の屋敷地は、前者ならば14.0847石、後者ならば14.6847石である。残る屋敷高が「七ツ六分」に相当し、その屋敷高は13.335石である。これらも「九ツ三分」と同様に屋敷高を正確に合わせて位置を確定することができないが、「七ツ六分」および「五ツ六分」の屋敷地については町別免割記事等との間に大きな差異はないと言ってよい。

一番下町における「九ツ六分」1.2748石の屋敷地も位置は明らかではない。一番下町のほとんどは「九ツ三分」の免相であるが、その中で旧「九ツ六分」の免相の屋敷地を想定するならば、七間町通付近と考えることが妥当であろう。また、正善町通の屋敷地については表4を見る限りでは「九ツ三分」であったと考えざるを得ない。それが「五ツ六分」への変更が計画されたことは、同じように町人地の縁辺に位置する横町の免相の変化とは対照的である。

以上、一番上町・一番下町の免相・免割の変更案に関する検討を通して、一番町通と七間町通の交差する付近で免相が低下するように変更案が作成されていたことが確認できた。そこは上町口・三之丸会所に近く、町蔵も南側に位置している。土井家時代だけでなく、松平家時代から御免地を有する有力町人も多く、景観的には蔵家が多い越前大野の行政的・経済的中心といえる場所である。そこでの免相の低下は中心部の相対的衰退ということもできるが、町政上の中心である点には変わりがない。したがって、近世中期に越前大野では町政上の中核的機能

と経済活動上の中心の分離が進行していたと考えるほうが適当であろう。現時点では具体的に検討する術をもたないが、免相・免割の変更に関する検討が進んでいたことは近世城下町越前大野の構造的変化を考える良い手がかりになると思われる。

#### 4. おわりに

以上、「大野町免割絵図」の記載内容をめぐって、主題である大野町の免割と意味的に補完関係が認められる文字情報を抽出し、一番上町・一番下町、そして横町の3町を対象にして寛保3年あるいはそれ以前の免相・免割とそれに対する町方の変更案の異同について検討を進めてきた。享保15年から宝暦13年まで3町の屋敷高が基本的には変化していなかったにもかかわらず、寛保3年の町別免割記事の免相と免割に基づく屋敷高がそれらと一致しないという問題点はあるが、少なくとも免割絵図を通して見た免相・免割の変更案には少なくとも二つの注目すべき点があったことを指摘できる。その一つは町人地中心部の免相・免割の低下であり、一つは裏屋敷地・野高の屋敷地を表屋敷同様に屋敷高に組み込み、新たに設定された免相に従って税負担をすることが提案されていたことである。

しかしながら、それは変更案の一端を探った結果でしかなく、寛保3年以前の全体的状況は未だ把握しきれていない。さらに、変更案をうけて寛保3年以降にどのような免相と免割が実施されたのかという点は、未検討のまま残されている。大野町免割絵図の復元的考察の先には、大野城下の町人地で起きていた都市構造の変化や貢租負担をめぐる問題がある。こうした点の検討に向けて、寛保3年時点における免相・免割の復元的把握を全町的な規模で進め、変更案との移動を明らかにしていかなければならない。

#### 〔注〕

- (1) 大野市歴史民俗資料館所蔵「大野町免割絵図」。
- (2) 宮沢秀和家文書、天和3年「大野町惣高書上」（福井県（1992）『福井県史 資料編7 中・近世五』福井県、pp.432～435.）
- (3) 近世都市の成立過程における地子収取を石高制に基づく都市掌握の手段とする見解と、都市においては石高制が貫徹せず、都市特有の優遇策として地子免除が行われたとする見解があるという。いずれの立場にたつにせよ、城下町の地子に関する事例の研究は、岡山、姫路、和歌山、松本などにある。田中誠二（1979）「岡山城下町の地子と町役」、山口大学文学会誌30、pp25～44。三尾功（1994）『近世都市和歌山の研究』、思文閣出版、pp191～208。三浦俊明（1997）『譜代藩城下町姫路の研究』、清文堂出版、pp53～84。田中薫（2005）「城下町松本町の地子免除と町共同体」、信濃57—12、pp1023～1040。など。
- (4) 渡邊秀一（2011）「江戸中期の越前大野における浮地と渡り地—「渡り地浮地絵図」の理解に向けて—」 佛教大学歴史学部論集・創刊号 pp33～49。  
渡邊秀一（2012）「越前大野城下町における土地管理と景観—「渡り地浮地絵図」の考察から—」 佛教大学歴史学部論集2号 pp65～85。
- (5) 三嶋藤橘常通については不明であるが、当該図を安永年間に筆写した松田与惣左衛門は中野村



に居住し、大野藩大庄屋などを勤めている。

- (6) 「大野町役場ノ保管ニ係ル用留中旧大野藩ニ関スル書類 其十二 救恤ニ関する綴」の寛保3年の覚があり、「寛保三年亥正月廿六日 町年寄 矢田(ママ)源左衛門」の記名がある(大野市史編さん委員会編(1984)『大野市史(第5巻) 藩政史料編二』 pp641)。
- (7) 前掲(2)。大野町の枝村とは、篠座村(272.0225石)、印内村または野口村(193.663石)、金塚村(72.5125石)、清瀧村(52.23石)、西方寺村(4.814石)である。
- (8) 大野市歴史民俗資料館寄託・斎藤寿々子家文書「享保15年 大野町絵図」。
- (9) 「大野領諸宗寺方寺領記一」(大野市史編さん委員会(1985)『大野市史(第6巻) 史料総括編』, 大野市役所, pp445.)
- (10) 前掲(8), pp459~460. 「大野領諸宗寺方寺領記一」のなかに「大野町方寺社方并地子諸役御免許高附扣写」があり、明源寺について以下のように記載している。
- |                   |     |
|-------------------|-----|
| 御免許高壺石五斗          | 四番町 |
| 一、一向宗 内壺石ハ先々ヨリ御免許 | 明源寺 |
| 五斗ハ但馬守様御免許        |     |
- (11) 前掲(2)。
- (12) 弘化4年「午御物成皆済目録」は、大野市史編さん委員会(1981)『大野市史 諸家文書編二』大野市役所, pp523~531.
- (13) 大野市歴史民俗資料館寄託・斎藤寿々子家文書「宝暦13年 一番上町屋鋪高水帳」。なお、当屋敷高水帳は寛政9年(1797)10月に書写されたものである。
- (14) 大野市歴史民俗資料館寄託・斎藤寿々子家文書「享保8年 渡り地浮地絵図」。
- (15) 明源寺は「御先代方御免地」では0.86石であったものが、町別免割記事では1.5石で、0.64石の増加がみられる。この増加分が善導寺と同様に町屋敷地から与えられたものとも考えることも可能であるが、浄勝寺は「御先代方御免地」と御免地高が変わっていない。これらについては史料を欠くため不明である。
- (16) 横町が4地区からなることは、18世紀中期に至っても強く意識されていたようである。宝暦13年『横町屋鋪高水帳』にも大鋸町分に該当する15間の記載に続いて「是 □横町書始」と記載されている。
- (17) 大野市歴史資料館寄託・斎藤寿々子家文書「宝暦十三年 横町屋鋪高水帳」。
- (18) 裏屋敷については、横町以外ではほとんど確認できない。
- (19) 大野市歴史資料館寄託・斎藤寿々子家文書「宝暦十三年 一番下町屋鋪高水帳」。

(わたなべ ひでかず 歴史文化学科)

2013年11月15日受理